

教 仏 名 聞

第61号
(発行日)
2015年10月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始。
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

十方衆生のためにとて

(和讃法話)

十方衆生のためにとて

如来の法蔵あつめてぞ

本願弘誓に帰せしむる

大心海を帰命せよ

(浄土和讃)

現代語訳(浄土の菩薩方は、十方の衆生を救うために、功德を積み、衆生を教化して第十八願に帰依させられる。この浄土の菩薩の衆生救済は、その元は大海のように広い弥陀の大悲の心から表れてたものである。それゆえ、弥陀のお心に帰命したてまつれ。)

*

このご和讃は曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』の中の

「(安楽国土の菩薩は) 仏の法蔵を集めて衆生のためにす。ゆえにわれ大心海を頂礼したてまつる。」

に基づいて作られたご和讃です。このご和讃の意味は、阿弥陀仏の浄土に生まれたお方は仏になりたもうのですが、苦悩の衆生を救うために迷いの世界に還って苦しみ悩む者

をどこまでも救うていく働きをなされるといわれています。

こうした菩薩が衆生救済のためさまさまな行(自利利他

・供養諸仏・開化衆生)をなされる、それをここでは「如来の法蔵あつめてぞ」とうた

われています。

それによって、衆生をして平等に救いたもう阿弥陀仏の本願に帰せしめたもうのです。

その一切衆生を平等に救いたもう広大なお心である阿弥陀仏に依りたてまつれ、と仰せられるのです。

このような浄土の菩薩を還相の菩薩といいますが、還相の菩薩は如来法蔵様の願力を背景としており、それゆえ如来法蔵様(法蔵菩薩)の、一切衆生を救いたいという願心とご修行が還相の菩薩の源といえましよう。

私はこのご和讃を浄土の菩薩行の源である法蔵菩薩の願行のお姿としていただいています。

さて、『仏説無量寿経』に釈

迦如来様が説かれて

いますように、如来法蔵様が一切衆生を救いたいと願いを起こし、その願を実現する

ために永き菩薩行(五念門の行、諸波羅蜜の行)を行われました。それは一切衆生を救済するためであります。そこでこの和讃の「十方衆生のためにとて」の一句からこうした如来法蔵様の大悲のお心が響いてまいります。

衆生を救済しようとして起こされた本願も、またその願を成就するための修行も、それによって成就された極楽浄土も阿弥陀仏もお念仏も、みな「十方衆生のため」であります。すなわちそれは「我がため」であります。さらに、お釈迦様も浄土の經典も七高僧も親鸞聖人も、「私を救わんがため」であり、私に真宗の教えを説いて下さった身近な善知識方も、「私のため」であります。

お内仏にお参りして阿弥陀仏を拝むときは、「ああ私のための阿弥陀様」と受け取りたいものです。そして、一番身近に、口に現れて下さる南無阿弥陀仏は、阿弥陀仏ご自身であり、「私を救いたもう阿弥

陀仏の現れ」であります。信心といつても、この口に入りのお念仏が「私を救いたもう阿弥陀様であった」と知らされることの外にはありません。

私がこの世でどう生きるかという前に、「私に」あるいは「私のために」なして下さっている如来法蔵様のおはたらき、それが私の人生を全面的に支えて下さるのです。私たちの人生に決定的に大事なことは、「私がこれからどう生きるか」ということに先立って与えられている「私を撰取して下さっている真実(如来)」にあうことです。

次に「如来の法蔵あつめてぞ」についてお話しいたします。

死にゆく私たちを引き受けて罪と死を除き、死して迎え入れ給うお浄土も、救い主である阿弥陀仏(南無阿弥陀仏)も、みな法蔵菩薩様が私たちに代わってなしたもうご修行によって集積された結果の大功徳であるといわれています。

宗祖の『弥陀如来名号徳』には、阿弥陀仏の光のお徳である清浄光は「法蔵菩薩、貪欲のころなくして得たまへるひかり」であり、歡喜光は

陀仏の現れ」であります。信心といつても、この口に入りのお念仏が「私を救いたもう阿弥陀様であった」と知らされることの外にはありません。

私がこの世でどう生きるかという前に、「私に」あるいは「私のために」なして下さっている如来法蔵様のおはたらき、それが私の人生を全面的に支えて下さるのです。私たちの人生に決定的に大事なことは、「私がこれからどう生きるか」ということに先立って与えられている「私を撰取して下さっている真実(如来)」にあうことです。

次に「如来の法蔵あつめてぞ」についてお話しいたします。

死にゆく私たちを引き受けて罪と死を除き、死して迎え入れ給うお浄土も、救い主である阿弥陀仏(南無阿弥陀仏)も、みな法蔵菩薩様が私たちに代わってなしたもうご修行によって集積された結果の大功徳であるといわれています。

宗祖の『弥陀如来名号徳』には、阿弥陀仏の光のお徳である清浄光は「法蔵菩薩、貪欲のころなくして得たまへるひかり」であり、歡喜光は

陀仏の現れ」であります。信心といつても、この口に入りのお念仏が「私を救いたもう阿弥陀様であった」と知らされることの外にはありません。

私がこの世でどう生きるかという前に、「私に」あるいは「私のために」なして下さっている如来法蔵様のおはたらき、それが私の人生を全面的に支えて下さるのです。私たちの人生に決定的に大事なことは、「私がこれからどう生きるか」ということに先立って与えられている「私を撰取して下さっている真実(如来)」にあうことです。

次に「如来の法蔵あつめてぞ」についてお話しいたします。

死にゆく私たちを引き受けて罪と死を除き、死して迎え入れ給うお浄土も、救い主である阿弥陀仏(南無阿弥陀仏)も、みな法蔵菩薩様が私たちに代わってなしたもうご修行によって集積された結果の大功徳であるといわれています。

宗祖の『弥陀如来名号徳』には、阿弥陀仏の光のお徳である清浄光は「法蔵菩薩、貪欲のころなくして得たまへるひかり」であり、歡喜光は

「無瞋の善根をもつて得たまへるひかり」であり、智慧光は「無痴の善根をもつて得たまへるひかり」である、と説かれています。

また曇鸞大師の『浄土論註』には

「浄土は法蔵菩薩、諸波羅蜜を集めて積習して成ずるところ」と仰せられています。

「十方一切衆生を仏になすために」法蔵菩薩は「如来(仏)の功德を集め」る修行(諸波羅蜜)を積み重ねられたのです。それによって、浄土は私たちに開かれ、法蔵菩薩は阿彌陀仏に成られ、私たちを、このままなりで引き受けたたもう南無阿彌陀仏ができたのでしたのです。

たとえば六波羅蜜行の修行とは、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の行という、悟りに至る(波羅蜜)行いです。

まず布施行ですが、これは仏道を成就するための大切な修行とされています。布施行とは、返礼を求めず、「私がした」とか「してあげた」という自意識をもたず、困窮せる他のために財や物品や労働や法を施すことです。

布施行は仏になる行の一つ

ですが、はたして私たちはこれができるでしょうか。人に惜しみなく持てるものを与える行為、それも「してあげた」という自意識を起こさず、返礼や称讃を求めず、純粹に他人の苦しみに共感し、その人に安らぎを与えるために、自分にもてる物や能力や知識などを提供するという善行です。これをずっと続けていく行為を布施行といいます。それは「我」とか「我が物」という執着を離れる修行とも説かれ、また他の苦しみを除こうとする慈悲行なのです。

これが私たちにできるのなら、法蔵菩薩は私たちに代わって布施行をなされることはなかったでしょう。代わってなされたのは、私たちがそのような尊い布施行などは到底できず、「我が物」に執着し、惜しみ心がやまないゆえ、私たちは仏になれないと法蔵菩薩は見られて、私たちに代わって布施波羅蜜行をなしたものでありましょう。

次に持戒行です。戒律をきつちりと守ることで、たくさんある戒の中でごく基本的なのは五戒です。不殺生戒(殺したり傷つけたりしない)、不偷盜戒(ぬすまない)、不

邪淫戒(よこしまな男女関係を持たない)、不妄語戒(利益を得るためにウソをつかない)、不飲酒戒(酒などを飲まない)です。一番目は不殺生戒あるいは不傷害の戒で、暴力を振るって人のいのちを殺さないのは勿論、傷つけたりもしないことです。さらには、他のさまざま生き物のいのちも殺さないようにしていくことです。ですから牛肉や豚肉や魚を食べていることは、それらのいのちを殺す因縁を作ってますからこれは不傷害戒に背くことになっていきます。私たちは肉や魚を殺す因縁を作りながら、それを悲しむどころか「おいしい、うまい」といつてはばからないのです。それゆえ持戒波羅蜜を行ふことは非常に難しいことになります。

このような私たちに代わって法蔵菩薩は持戒波羅蜜行を行い続けられたのでしよう。

また忍辱行とは、他者からの罵詈雑言に腹を立てずこれを静かに受けとめ、相手を憎まない。そして苦しい修行に耐える行が忍辱波羅蜜行です。この世で、真実を真剣に求めて生きようとすると、必ずといっていいほど非難されたり

妨害されたり、時には弾圧されたりします。決してほめる人ばかりではありません。非難されることが多いのです。宗祖親鸞聖人も師の法然聖人も時の権力によって弾圧された。蓮如上人もさまざまに妨害に遭いました。釈尊の弟子の目連や蓮華比丘尼も殺害されました。また、キリスト教でもイエスは十字架には殺されたといわれています。ですから仏道修行に励むとさまざまに妨害や非難にあうことをまぬがれませんが、それを静かに堪え忍んでいくこと、それが忍辱波羅蜜行で大事な仏道修行です。

私たちは非難や暴言に耐えられなくなったり、相手を憎悪したり、あるいは厳しい修行に辛抱ができなくなり、仏道修行を遂行するはとても難しく、並の凡夫ではとてもできそうにもありません。そういう凡夫の私たちに代わって忍辱波羅蜜行をして下さったのが法蔵菩薩です。

また精進波羅蜜は仏道修行に邁進し、怠けないことです。禅定波羅蜜とは、坐禅を組み心を鎮め、真理を認識する行

です。そして智慧波羅蜜とは真理を学び、間違った考えを離れて、悟りの智慧を完成していく行です。これらも私たち凡夫がとてもしないがたい行であり、それゆえ仏になることは極めて難しいことになります。

そのような私たちに代わって法蔵菩薩はこれらの波羅蜜行という「仏になる行法」をなして下さり、功德を積習(集め)して下さったのです。そして、如来の法蔵集めてぞの文言から教えられるのです。そして、法蔵菩薩様は願行によって南無阿彌陀仏を仕上げ、これを私たちに与えて称えさせ、聞かせて下さるのです。南無阿彌陀仏は「汝を仏にする功德はすべてこの法蔵がなし集めたから、お前は以前の生地のままなりで助けるぞ助かるぞ」と仰せになるのであります。

この南無阿彌陀仏から洩れる人は一人もない、全ての衆生を受け入れて下さる大悲のお心でありますから、弥陀の本願はまことに広大なお心といわねばなりません。それゆえ「大心海(阿彌陀)に帰命せよ」と仰せられるのです。

(了)

真宗信心の問

(質問が当方へ寄せられます。その事例を取り上げ、それに対するの応答をここに述べさせていただきます。)

問①。

「たのませて助ける」、その事によって、阿弥陀仏と離れない身にさせていたたくとお聞きしましたが、「なぜ阿弥陀仏をたのめば、阿弥陀仏と離れない身になるのでしょうか」

お答え。

まずこの場合、私の本質を「私の心」であり、阿弥陀仏を「阿弥陀仏のお心」と限定させて、そこから考えていきたいと思います。

なぜなら、阿弥陀仏と離れないということは心の領域で起こりますから。いわば心と心の関係です。

私の心、それを凡心と申します。この凡心が仏のお心と一つになって離れないのを仏心凡心一体、「仏凡一体」と古来から申しております。凡心がなくなつて仏心だけになるではありません。

仏心大 悲は、この私(凡心)に、本願の仰

せの「言葉」で喚びかけておられます。それがお念仏の声であります。

南無阿弥陀仏の、南無は「まかせよ」「たのめ」阿弥陀仏は「まるまる引き受ける」「助ける」の仰せであります。南無阿弥陀仏は「タスケルで、たのめ」の大悲の仰せであります。

この仰せは、三定死さんじょうしの私、いわば助かる縁も手がかりもなく、いきづまっている私にとつては余りにも有難くて、

「ああこんな私を」といだけかざるをえません。その時、大悲のお心にまったく打たれてしまつて、「ああ有難い」と受けとらざるをえなくなりま

す。それがおのずと「マカセヨ」の仰せのままにおまかせしたことになるのです。

その時、はからずも、大悲の仏心は凡心に至り届いて下さり(この事はあとで分かります)、いわゆる「真心徹到」し、仏心は凡心に離れなくなつて下さいます。それを「本願力の回向成就」と申します。しかもいったん届いて下さ

るともう絶対に離れないのですね。ですから「なぜ離れなくなるのか」といえば不思議というホカはありません。

仏心には無碍光の徳があるといわれています。無碍光の徳とは、凡夫の側のどのような悪業煩惱にも仏心は妨げられずに、凡心の底に至り徹つて離れなくなつて下さるお徳です。『安心決定抄』に

「仏心はわれらを愍念みねんしたまふこと骨髓こつぞうにとおりて、そみつきたまえり。たとえば、火のすみに、おこりつきたるがごとし。はなたとすると、はなるべからず。摂取せつしゆの心光、われらをてらして、身より髓ずいにとおる。」

と仰せられているとおりです。これが阿弥陀仏と離れない身にさせていただくということです。

問②。

「煩惱具足であり、無知無能で助かる縁なき私」とどうしたら分かるのですか。

お答え。

念仏聞法し、私にかけて下さっている大悲の本願のお心を聞かせていただくことによつてです。「我が名を称えるばかりで、引き受ける、汝は無

知無能で自分で自分をどうすることもできないのだから」という阿弥陀仏の大悲のご本願をお念仏申しつつ聞くことによつてです。

阿弥陀仏が「まかせよ」と仰せられるのは、まるまる引き受けていただかなくては、いかんともし難い私だからです。私が自分で自分を助けることができ存在なら、阿弥陀仏は「マカセヨ」「タノメ」とは仰せられないでしょう。

ご本願の仰せである「ただ称えるばかりで助ける」という思し召しは、私の心は煩惱ばかりで、まことの心は何一つ無いということ、如来法蔵様はすでに徹見されていて、そんな私なればこそ、「汝の心には真実はない、それゆえその心に何も要求はしない。汝はただ口に称えるばかりでなにもいらぬ」との丸助けの

ご本願のお心に照らされて、我が心が煩惱ばかりと逆に知らされるのです。

それでも「なかなかそうは思えない」というツブヤキが起るかも知れません。それも、すでに阿弥陀様の勘定かんじやう済みです。そのような自分が、悪業煩惱の者とも無知無能の者とも、極重悪人とも思えない、そういうどうしてみようもない愚かな私であればこそ、「マカセヨ」と仰せ下さっているのです。いつも逃げ回っている私をどこどこまでも「そんなお前だから」と追っかけ追っかけて、私のところ、今南無阿弥陀仏と喚びかけて下さっているではありませんか。

(了)

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(火)

午後二時始

ご講師 大谷大学准教授(真宗学)

藤原正寿先生

*なおお十二月二十一日は午前十時より 勤行・法話(念佛寺住職)があります。

木村無相さんの法信 37

(昭和五十八年十一月七日のお便り。ご往生される二ヶ月前です。無相さん七十九才)

(前号からの続きです)

* * *

それで、ただ念佛せよの「よき人の仰せ」

「如来の勅命」のまんまに

ただ念佛申す

ただ南無阿弥陀仏と申す

ただ、このこと一つで、

「信ずる」こと、

「タノム」こと、

「ハカライなくマカセル」こと、

「無義」ということに、

なっているのでありますから

「勅命のまま」に

念佛申すこと、

ただこのこと一つのほかに浄土真宗の信心も、安心もないのであります。

○

それで私は、

『歎異抄』第二條の

親鸞におきては

ただ念佛して

ミダにたすけられまいらせて、

信ずるホカに

称えるホカに別の子細なきなり

で、

念佛一つ

に大安住させていただいているのであります。

○ 紀さんの「大鉄槌」のアトがわからんので、自分のただ念佛信心のありのままを書かせて、もらいました。

○ 『歎異抄』の結文に、

善信が信心も

聖人の御信心も一つなり

と親鸞聖人の仰せがありますが、今は

無相の信心も

親鸞聖人の御信心も

一つなり

とヒトリで喜ばせていただいています。

ヒトリだけでなく「行学」の藤原幸章先生

また、そのように、おっしゃって下さいます。

○

「この上は、念仏をとりて、信じたてまつらんとも、すてんとも、メンメンのおん

はからいなり」

であります。

○ 私は「末灯抄・ご消息」はもちろんのこと、

「歎異抄」に、聖人のお言として、唯

円房がとりついでいるお言葉もまた聖人のお言葉と、

いただいているのであります。

○ 紀さんの手紙にある「ご消息」のお言葉

は次のようにいただいております。

他力と申すは行者のハカライのちりばかりもいらぬなり。

とあるのは、

ただ念佛せよ

の「よき人の仰せ」

「如来の勅命」のまんまに

ただ念佛申すことが

「他力の信」

「他力の行」なのであって、

「よき人の仰せ」

「如来の勅命」のまんまに

ただ念佛申すことが、

行者のハカライをチリばかりもせぬこと

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○

それが「無義」ということ、「ハカライ

が無い」ということでありましょう。

○ 杖も書かず、四時半の夕食まで、一時間、目をつぶって

念佛申し申し、

やすませてもらいます。

○

「体力」なく「視力」なく、これ以上く

わしく書けません、これが最後の手紙と

なってもよいと思うほど大事なことを書か

せてもらいました。

○

極重悪人唯称仏

ただ念佛して

○

「よき人の仰せ」

「如来の勅命」の

ままに

唯念佛申すホカに

私の信心、安心はありません。

○ 凡心が信ずるとか、疑うとかは、一切問

題ではありません。

○

ただ仰せのみ

勅命のみ

○

皆、元気でいて下さい。

○ 真由実さんよろしく々々々々

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

合掌

(五八・十一・一七。(月) 午後三時五十分)

